

(様式 5)

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立志貴野高等学校・教諭・福田 達也
- 2 研修期間 令和6年7月25日(木)～令和6年7月26日(金) 2日間
- 3 調査研究課題 教師と企業人との交流
- 4 研修機関等 富山経済同友会
株式会社インテック 大山研修センター

5 研修の概要

(1) はじめに

昨年度は高等学校で初めて3年生を担当し、進学指導や就職指導、そして卒業式を迎えて生徒を社会へ送り出す経験をした。この1年間は私にとってかけがえのない時間となった。しかし、私は学校以外の社会に属する方々との交流が浅く、そのような私が就職希望の生徒に発する「社会に出るためには」「社会人として大事なことは」という言葉がけが、非常に軽く、狭い視点からの偏ったものなのではないか、と感じた。そこで、自分の視野を広げ、価値観をアップデートするきっかけにし、学校現場で私が生徒に伝えるべきことはどのようなことなのかを見つめ直す機会とするべく、「教師と企業人との交流」に参加した。

(2) 研修について

研修は2日間行われ、1日目は各講師の講演を聞いて教員数名と経済同友会の方1名のグループで意見交換、2日目は体験型アクティビティ研修が行われた。

- ・講演① (株)MGG 代表取締役社長 牧田 和樹 氏 「人間力について考えよう！」

過去のうまくいかなかった経験とともに、人を動かすために必要なことはどのようなことかについて講演をしていただいた。グループでは主に、この考え方をどう教育に落とし込んでいくかについてディスカッションを行った。

これまでの人生を振り返ると、「納得できず、そう動くべきではない」と思った経験、「望ましいことを伝えても行動に変化がない」と思った経験、異なる角度からの経験が何度もあった。その中で、人を動かす力、人間力という概念がとても腑に落ちた。講演のなかであった人間力の3要素いづれにおいても、自分には全く足りていないと反省したとともに、自分が教員として働く中のフラストレーションの原因が可視化されたように思う。

- ・講演② YKK(株) 副社長 黒部事業所長 小林 聖子 氏 「自分らしく働く」

「女性初」ということばかりであったキャリアを形成していたのは偶然であったことや、これまでにあった困難を乗り越えてきた要因は何だったかについて講演していただいた。その中で「思ったことは言わないといけない」という話があり、グループでは主に、自分の意見を他者に伝えるときに重要なことについてディスカッションを行った。

「自分らしく働く」ためには「自分とは何か？」を明らかにしないとできないことであり、そこが自分の弱いところであり、課題だと感じた。「思ったことは言わないといけない」という言葉も、自分の価値観、判断基準が必要で、それが養われることで、人間としての懐の深さや順応性につながるのだと考えた。

- ・講演③ (株)ユーグレナ 代表取締役社長 出雲 充 氏 「僕はミドリムシで世界を救うことに決めました。」

バングラデシュでの体験から起業にいたったご自身の経験をもとに、どういう子どもが起業するのか、どうしたら子どもたちがイノベーションを起こせる人材になるのかについて、講演していただいた。

「メンター」と「アンカー」によって、人は努力を続けられるという言葉がとても響いた。自分がただちに生徒にとっての「メンター」になれるとは思わないが、いつの日か、そういう存在になれるよう、人間性、人間力を高めていくことが必要であると感じた。生徒に身に付けさせたい「何かの一番を目指す」という姿勢には、とても考えさせられた。

- ・体験型アクティビティ研修

2日目は、6～7人のグループに分かれ、課題について考え、協力しながら取り組むアクティビティ研修が行われた。与えられた課題は、手をつないでフラフープをいかに早く一周させるか、一

本橋から落ちないように人の順番を入れ替えることができるか、目隠しした人を誘導してテントを立てることができるかなどであった。研修の後半はアクティビティ研修での気づきを活かしながら、「人が育まれるために必要な要素」についてグループごとにディスカッションを行い、全体で共有を行った。

課題をクリアするために必要なことは何か、与えられた様々な条件の中で優先すべきは何か、普段生活している中で気づきにくく、忘れがちな視点や立場で物事を考えることができているかということが問われ、足りていないことに気づかされた。また、研修の終わりには自然とグループ内で打ち解けあっていた。アイスブレイクは何度か経験したことがあるが、今回のような感覚は初めてであり、これまで体験したものの違いは、自らが活動に対して前のめりに取り組んでいるかどうかであった。なぜこれまでは前のめりでなかったかと振り返ると、提示されている目的が「距離を縮める」なのか、そうではなく別にあるのか、という違いがあった。これこそがアイスブレイクの肝要なのではないかと考察した。前のめりに活動に参加させるにはどうすればよいのか、今後の生徒との人間関係の構築の手がかりとして生かしていきたい。

(3) 終わりに

講演やディスカッション、アクティビティ研修で様々な方との交流を通して、昨年度に感じていた自分の指導の重みのなさが、自分は何事にも知らず知らずのうちに「傍観者」の姿勢で取り組んでいたことが原因なのではないかと考えさせられた。そのために、自分の考えや思いがはっきりとせず、生徒に対してもぼやけた言葉として伝わっていたのであろうと思う。今後は、自分は物事の「主体」であるという当たり前のことを自覚し、日々の業務や自己研鑽に取り組んでいきたい。そうすることが、自らの人間力を高め、学校生活や授業において、生徒に対して良い影響を与えることにつながるのだと思う。研修の最後に参加者と共有した、「一步踏み出す」という決意を胸に、今後も様々なことに取り組んでいきたい。